

岡崎城跡 月見櫓

発掘調査中!!

2017
8/14/月/

2
9/22/金/

調査は平日のみ。

雨天中止

調査の進捗状況により
調査期間の変更が
あります。

明治5年(1872)頃の月見櫓

2017

9/2 /土/ 11:00 / 13:00

現地公開 10:00 ~ 14:00

申し込み不要、直接現地へ

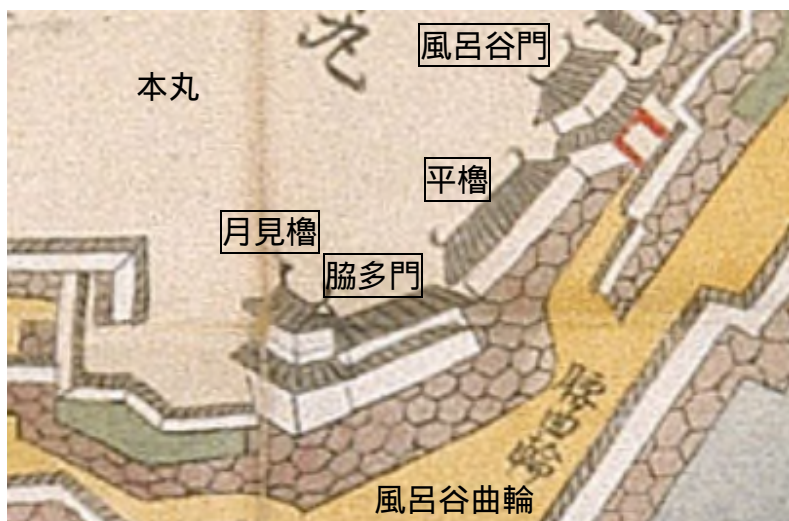
荒天中止

岡崎市教育委員会 社会教育課 文化財係
Tel 0564-23-6177

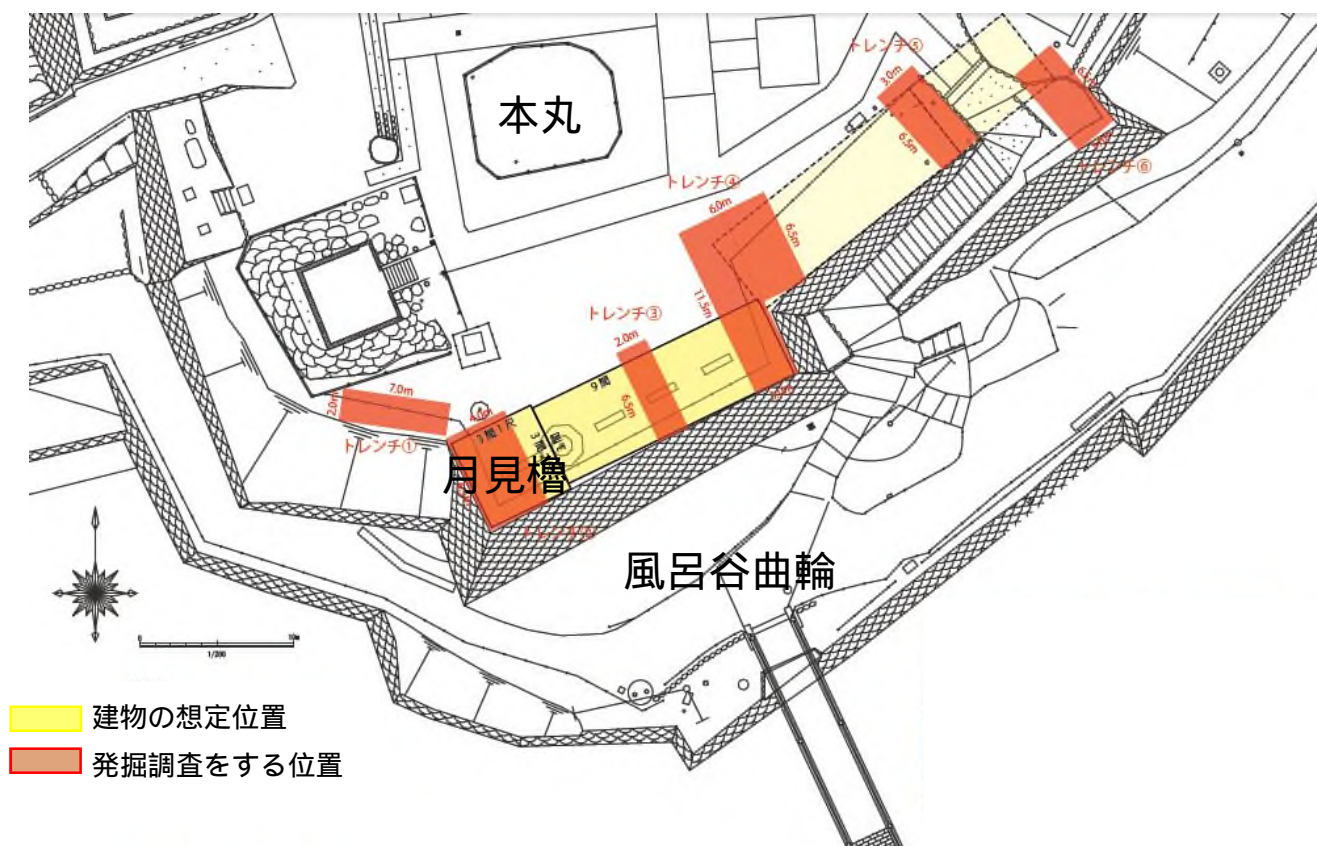


調査の経緯

岡崎市では平成 29 年 3 月に「岡崎城跡整備基本計画」を改定したことを受け、整備を進めていきます。その第一歩として、まだまだ不明確なところの多い岡崎城の城郭遺構について積極的に調査研究していくこととなりました。



江戸時代後期の絵図に見る月見櫓周辺
(下の図と照らし合わせてご覧ください)



建物想定位置（黄色部分）と発掘調査箇所（赤色部分）

月見櫓発掘の目的

月見櫓は古写真に写るように、明治初年まで存在していたことが確認できます。この月見櫓の建物基礎部分の残存状況の確認を目的に発掘調査を実施します。合わせて月見櫓から続く脇多門櫓や風呂谷門の残存状況についても確認します。

月見櫓とは

名前のとおり、「お月見」をする建物のことであり、絵図で「月見櫓」と表記されることもあります。実際にこの櫓でお月見をしたかはわかりませ



松下鳩臺の描いた月見櫓（江戸時代後期）

んが、月見櫓から南側は遮るものがなく、お月見には絶好の位置にあたります。

一方で眼下には風呂谷曲輪の狭い通路を見下ろし、矢を射掛ける絶好のポイントでもあり、防衛上も重要な櫓であったと考えられます。

発掘調査の公開

発掘調査状況を随時公開しています。フェンスの外から発掘調査状況をご覧ください。危険ですので、フェンスの中には入らないようにお願いいたします。（中に入れるのは現地説明会時のみとなります。）発掘調査期間中はご迷惑をおかけしますが、調査への御理解と御協力のほどお願いいたします。

岡 崎 城 の 歴 史

明大寺を拠点としていた西郷氏が、西郷頼嗣の代に北方からの松平氏の進出をにらみ、享徳元年（1452）から康正元年（1455）にかけて明大寺地区から乙川を挟んだ龍頭山に砦を築き、北方の備えとしたのが岡崎城の始まりとされます。その後、明大寺を制圧した松平清康が享禄3年（1530）頃に岡崎城に本拠を移し、松平広忠、徳川家康へと継承され城郭整備が図られました。天正18年（1590）に豊臣系大名の田中吉政の居城となって以降、織豊系城郭に改修されていきます。

岡崎城本丸北側に「清海堀」と呼ばれる深さ10m、幅20m程の空堀がありますが、これは西郷頼嗣の入道後の号「清海」に由来するとされ、後世の拡張を想定しつつも中世城郭の様相を示す遺構とされるが、詳細は不明です。水野家岡崎藩主時代（1645年以降）成立の『岡崎領主古記』には「権現様の御縄張」が行われたことが記され、家康の岡崎城拡張・整備を伝えますが、同時代の遺構を発掘調査からは見いだせていません。

天正18年（1590）に徳川家康が関東移封された後に、豊臣系大名の田中吉政が入城すると、天守台石垣を築き天守を造営し、岡崎城を織豊系城郭化していきます。また、田中氏開削とされる総堀は「田中堀」とも称され、総堀内に東海道を移転するなど城下町の本格的な整備も始まります。

慶長6年（1601）に譜代大名の本多康重が入城し、以後3代続く（前本多家）。元和3年（1617）に三重天守閣を再建し、慶長18年と元和9年の將軍上洛の際の宿泊のために二の丸に御殿をそれぞれ建てた他、3代藩主忠利の時に菅生川端石垣が構築されました。

正保2年（1645）に水野忠善が入城すると、本多氏の城郭・城下町経営を受け継ぎ、総曲輪内における土庶混住を整理し、侍屋敷の拡張を行い、総曲輪の出入り口を整備することで城下町の最終的な整備が行われました。これにより、17世紀中頃には投町から松葉町に至る菅生郷の全域が城下町として編成されました。

宝暦12年（1762）に松平康福が入城するが、7年後の明和6年（1769）には本多忠肅が城主となるが（後本多家）、この頃はあいつぐ災害から藩財政が逼迫し、藩政改革に迫られ、岡崎城郭整備に関する記録は僅かです。

明治維新後の明治6年（1873）の廃城令後、城郭内の建物は取り壊されました。また、昭和20年（1945）の岡崎空襲により岡崎公園一帯も被災しましたが、戦後の昭和34年（1959）には天守閣を復興し、昭和37年には岡崎城跡として岡崎公園部分が岡崎市の史跡に指定されて現在に至ります。



岡崎城郭図